

「底が突き抜けた」時代の歩き方 527

「理念」なきゲームオーバーとしてのライブドア事件

今回のライブドア事件について、敗戦直後の混乱期に起きた光クラブ事件とダブらせながら言及している論考がいくつか目についた。最初に目にしたのはライブドア事件前に書かれた、保阪正康『真説 光クラブ事件』についての大塚英志の書評（『週刊ポスト』05・6・3）である。彼はここでホリエモンについてこう述べている。

《堀江の行動を理念がない、マネーゲームだと批判してきた人たちは、彼が本当にゲームをやっているに過ぎない、という一点を見逃してはいないか。マネーゲームは経済活動をゲームに喩えた語だが、堀江は比喻ではなく素でゲームをやっている。ただ「所詮ゲームだ」とうそびているのではなく、真剣にゲームをやっている。ゲームセンターにいくとアーケードゲームのモニターに高得点者の名がずらりと並んでいるが、堀江にとって「時価総額」でソフトバンクを抜いて1位になることはつまりは高得点者の1位になりたい、という感覚と殆ど同一ではないのか。ゲームの攻略法を考えるようにフジテレビを攻略したら攻略できちゃっただけの話で、結局、金、受け取ってるじゃんって言われても、ゲームでは敵を倒したりステージを攻略すれば所持金が増えることになっているのだから、どっちが勝った負けたという次元ではなく、単にフジはクリアされただけの話だ。だからゲームをする子供に何故ゲームをするのと聞いたところで全く話が噛み合わないように、堀江に「理念」なんて問うたところで意味はないし、却って「理念」のあるゲーマーの方がはるかにうさん臭い、ともふと思う。》

大塚英志が書評の冒頭から堀江貴文に触れるのは、堀江貴文^{あぶ}を登場させることによって光クラブ事件の山崎晃嗣と共に、堀江自身の特性も強く炙りだされてくるからだ。堀江貴文を「理念」なきゲーマーとしてみると、山崎が《「理念」のあったゲーマーとして描かれてい》るのが際立ってくる。彼はそこを切り口として書評を押し進める。

《保阪によれば山崎の本質は「戦争というメカニズム」をなんらの自省もなしに進めていった職業軍人」と、その土壌さえあった「庶民の俗性」を暴こうとしたことにある。それが「権利のための闘争だ」と唱いながら社員たちが借金をとり立てた光クラブの偽悪的でさえある思想の基調にあったようだ。本書は事件をモデルにした小説「青の時代」を記した三島由紀夫が山崎と密接な親交があったことを立証していて何より興味深い、山崎にも三島にも虚構を露悪的なまでに生きようとしているところがあって、しかし保阪は山崎の自己演出であるゲームのような生き方の背後に「戦後日本の俗物性」への怒りを必死で読みとろうとする。ぼくはこの保阪の説明に戦後知識人に共通の「戦後日本

の俗物性」への嫌悪の起源を初めて理解した。これは発見だった。だから却ってぼくには山崎が、大衆の「俗物性」を怨嗟する戦後のありふれた知的大衆の一人のようにも思え、堀江貴文に向かって「戦後日本」を投影し、嘆いてみせる人々は、自死することさえしなかった山崎の末裔ということになるのかもしれない、とふと思った。山崎は大衆の中に自らの鏡像を見出し、嫌悪の余り自死したが、堀江は戦後知識人の基調にある「大衆の俗物性」への憎悪がすっかり抜け落ちている。そこにぼくは堀江のちょっとした可能性さえ見るのだが。》

ホリエモンに《戦後知識人の基調にある「大衆の俗物性」への憎悪がすっかり抜け落ちている》とすれば、それは彼自身「バカ」とみなす大衆になんの思い入れもないこととちょうど見合っている。戦後知識人が「大衆の俗物性」を憎悪するのは、彼らの大衆への思い入れが「大衆の俗物性」によって阻害されているのを感じていたからだ。知識人 - 大衆の構図のなかでしか知識人という存在が成り立たないことを知り抜いている戦後知識人は、大衆への自分たちの思い入れが空転を免れえないとすれば、その空転を「大衆の俗物性」になすりつけ、それへの憎悪において自らの存在証明たらしめてきた。もちろん、あるがままの大衆は知識人のために存在しているわけではないから、「大衆の俗物性」を発揮して知識人の理念を無化しようとする。ホリエモンが「理念」なきゲーマーであるなら、彼は当然「理念」をもって大衆に近づくことはない。だから、彼からすれば、あるがままの大衆は「バカ」以外のなにものでもないのだ。大塚英志は知識人 - 大衆の図式から逸脱したそんなホリエモンに、「ちょっとした可能性」を感じたというだけのことである。

同じくライブドア事件と光クラブ事件を対比させている柳田邦男は、「酷似する二人の寵児と時代背景」(2・7付毎日夕刊)で、光クラブ事件のアウトラインを描いている。

《戦後の混迷が続いていた昭和23(1948)年9月、東京大学法学部の学生山崎晃嗣が高利貸のヤミ金融会社「光クラブ」を設立した。山崎は友人らから借り集めた1万5千円で、《遊金利殖・月1割5分》という派手な新聞広告を出して投資家を誘い、集めた借入金を金詰まりの中小企業経営者や商店主に月3割の超高金利で貸した。闇の投資家が多く、ボロ儲けは成功した。

はじめは東京・中野区に店を開いたが、多額の金が集まるや、復興し始めた銀座に事務所を購入して進出し、大々的に宣伝を始めた。折から株式ブームが興隆したことにも目をつけた。《買った株が3割上がったら売り、その金を別の株に投資する。下がった場合は2割5分下げで値上がりを待たずに売る》という原則を決めて百回売り買いを続ければ、資金は5百倍になる。これが山崎の投資術だった。

華々しい銀座進出と派手な宣伝で、山崎は「東大生社長」として一躍マスコミの寵児となった。だが翌24(1949)年7月、暴利による物価統制令違反容疑で逮捕されると、光クラブの信用は失墜し、投資家が集まらなくなり、多数の債権者に借金を返す

ことができなくなった。実は、集めた金はほとんど派手な宣伝費と利子払いと30人以上の社員の給与と女につきこむという自転車操業だったのだ。その年11月、山崎の自殺で光クラブは消滅した。》

『文藝春秋』で昨年5月号からの連載「心の貌^{かたち} 昭和事件史発掘」で、ライブドア摘発の9ヵ月も前から《山崎と堀江社長（当時）との共通項と危惧について論じ》ていた彼によれば、双方の「思想と行動の特質」が次のように抽出される。

《自分の才能への過剰な自信と自己中心。トップでなければ満足しない性格（東大で前例のない全優の成績への挑戦。実際20科目中17の優を取り、昭和初期の首相・若槻礼次郎以来と言われた）。「自分の能力の限界を客観的に表してみたい」という動機による高利貸と株取引への挑戦。既成の権威、慣習、モラルの否定と反逆。人間不信と拝金主義。「女は男より劣等」という女性観による性的目的だけの女性遍歴。欺瞞と虚構の経営でもメディアへの派手な自己露出により投資家集めに成功。法規の隙間を見抜いて、違法行為を正当化する理論武装。》

《自分の能力への自信。自己中心。「経営規模世界一」が目標。「金を持っているやつが偉い」と断言。コツコツ働いて中流で納得していた親父たちの世代はばかをみただけ。お金を一気に集めてリスク覚悟でがんがん回せば億万長者になれる。「稼ぐが勝ち」なのだ。堂々と「人の心はお金で買える」、「女は金についてくる」と言う。違法な虚偽の買収公表や粉飾決算などで株価のつり上げをしても、六本木ヒルズ進出やメディアへの派手な自己露出で、IT時代のヒーローになり、犯罪意識はまるでない。》

前者が山崎、後者が堀江前社長の「思想と行動の特質」であるが、柳田邦男は時代背景が酷似していることに注目する。《終戦直後は古い社会制度、財閥支配の経済、長幼序列の道德律が崩壊し、金をつかんだ者が起業をして成長し得たので、若い野心家たちが続々と登場した。》他方、ホリエモンの登場もまた、「第二の戦後」といわれるバブル経済崩壊後の混乱期であった。《大企業の経営の安定と権威、終身雇用制度が崩壊し、そこへIT革命が重なったため、海千山千のIT関連新興会社が登場した。加えて企業自体が商品となり、企業の売買が日常化した。結果、実体経済からかけ離れた、操作された企業の資産価値と株価という数字ばかりがパソコンを介在して飛び交う中で、ハッタリを利かす無法者が勝ち組になり得た。》

旧社会秩序を支配していた価値観^{びんらん}が新社会秩序を支配する価値観^{ばうこ}に取って代わられる大きな転換期においては、価値素乱者が台頭するのは必至であり、山崎やホリエモンのようにその中で最も先鋭的な連中が旧社会秩序側からの標的^{はんも}となって、失墜させられることになるのは、同様に光クラブ以降に民間金融会社が跋扈して繁茂するように、ライブドア以降のIT関連企業が跋扈して繁茂するであろうことも、すべて絵に描いたような歴史的繰り返しといわざるをえない。柳田邦男はそのことを指摘しただけで、それ以上のことに踏み込んでいるわけではない。だからライブドア事件に関して、《巨額の金

を動かしても、すべてパソコンによるバーチャル（仮想現実）の世界の操作》のなかでの、罪の意識が生じにくいゲーム感覚において処理されるから、《第二、第三のホリエモンが登場する可能性》のある《危うい時代》であり、《企業人も若者も、この国の危うさを見抜く力をこそ身につけてほしい》などと、通り一遍の繰り言を主張するしかない。

光クラブの山崎との共通性において捉えられるホリエモンではなく、山崎からはけっしてみえないホリエモンを我々は探し出さなければならないのである。つまり、山崎に回収されることのないホリエモンを掴んでこそ、我々が生きている今の時代に触れることができる筈なのだ。大塚英志は「理念」あるゲーマー山崎に対して、「理念」なきゲーマー堀江貴文を見出すことで、今の時代に触れようとしていた。長山靖生は「偶像『堀江貴文』の失墜」(1・27付神戸)で、大塚英志が押さえた「理念」なきゲーマーとしての堀江像を踏まえて、彼にはおたくのような執着心は感じられず、《きわめてニュートラルな態度で物事に対》するが故に、《その判断基準は「損か、得か」だけであり、「正しい、正しくない」はもちろん、「好き、嫌い」さえもなかった》として、こう続ける。《あえていうなら彼はゲーマーなのだ、と私は考えていた。ゲーマーとは、ゲームに没頭する者のことで、おたくと混同されがちだが、資質は大きく異なっている。おたくは自分がこだわる対象を愛しているが、ゲーマーは「価値」を重んじない。すべては「どうでもいい」のであり、同じ「どうでもいい」なら高得点（マネーゲームの場合はもうけの多い）が「勝ち」というだけのことだ。取り組むゲームの質的内容へのこだわりも薄く、時には自分がやっているゲームを「くそゲー」などとバカにしさえする。

もっとも、醒めているからこそ、淡々と勝負に打って出ることができたのかもしれない。しかし堀江前社長は法律という最低限のルールさえも守らなかったとされる。この点、彼はゲーマーとしても失格してしまった。

では、おたくではなくゲーマーにもなりきれなかった彼は、実際は何者だったのかといえば、現代の経済人そのものだというのが、正解だろうと思う。》

ホリエモンはどうして、《現代の経済人そのもの》なのか。《ハイリスク・ハイリターンの賭けに打って出る度胸も、法律違反すれすれの抜け穴的方法を見つけ出す知恵も、今日では「有能」と評価されてしかるべきものだと思われている。だからこそ彼は、時代の寵児ともてはやされた。彼は今時の若者やおたくではなく、虚妄の「回復」^{けんでん}が喧伝されている日本経済にいちばん似ている》ということだが、要するに、《虚妄の「回復」》のなかで堀江流を押し上げ、活用していったのは紛れもなく日本経済であったが故に、彼は《現代の経済人そのもの》にほかならなかった、そういうことだ。だからといって、彼の失脚は《現代の経済人》としての失脚を意味しているわけではなく、《現代の経済人》から滑り落ちた単なる彼自身の失脚しか意味しなかった。日本経済はそうみなして、《虚妄の「回復」》に向かおうとするのだ。

自分のテレビ番組でホリエモンを持ち上げ気味だった田原総一朗が、例えば2・4付

朝日朝刊のコラムで「若い企業の志をつぶすな」と声を張り上げるのも、違法性のないホリエモンが《現代の経済人そのもの》であることを認めていたからだ。《ニッポン放送株の大量買収の場合でも、免許の壁で閉ざされ、「最後の護送船団」といわれている放送業界に体当たりして風穴を開けようとしたととらえて、少なからぬ世論、マスメディアがホリエモンを支持した》し、《親の社会的地位によって子どもたちの「希望」にさえ「格差」が生じ、多くの若者たちが夢を持てない閉塞の時代に、彼の異端を絵に描いたような乱暴な言動が、希望の星と映ったので》はなかったかと、ホリエモンのなにもかもを犯罪者として葬り去ろうとする動きを彼は批判する。プロ野球近鉄球団の買収でも、プロ野球運営の《旧弊の壁に穴を開けた》のはホリエモンだったし、《その風穴から三木谷・楽天と孫・ソフトバンクがプロ野球の世界になだれ込ん》できたのに、《風穴を開けた当人だけがはじき出されて、悲運のヒーローとなった》のではなかったか。

ホリエモンが法を逸脱していたのが明らかであれば、罰されるのは仕方ないが、法を逸脱していない第二、第三のホリエモンまで価値素乱者扱いで押さえ込もうとする日本全体の空気に異議を唱えているのだ。《ホリエモンのような不埒ものを一切出させないという狭^{きょうあい}隘な発想は、経済の成長を妨げ、多くの若者たちの企業の志に冷や水をぶっかけることになる。》堀江流を持ち上げて、ホリエモンをいい気にさせたメディアの責任の一端に連なっていたであろう彼としては、日本経済や日本社会がホリエモンのような経済的、社会的行動を欲望していたことをどうしても頼被りにできなかったし、自らの責任に対する弁明をそこに求めざるをえなかったのだろう。「マネーゲーム」の言葉でホリエモンを糾弾するなら、株式や外貨売買などに多くの人々が参入しているのも「マネーゲーム」だし、そもそも金融資本主義は「マネーゲーム」によって成り立っているのではないかと、という大いなる反論が彼の気持の中に巣くっているのだ。

この田原総一郎の論調は、ライブドア事件を取り上げる海外メディアと重なっている。《「ワールドニュース・ネットワーク」という世界のメディアを集めたネットサイトで、「horie」を検索すると、この3週間で820件のニュースが流れていて、「koizumi」の660件をはるかに上回っている》と紹介するのは、2・1付朝日朝刊の高成田享論説委員のコラム「『改革者』の側面を重視」であり、《欧米以外でも、トルコ、南アフリカ、イランなどさまざまな国のメディアが取り上げた。「スーツ姿の男たちにTシャツで渡り合い、日本の企業社会を翻弄した」(イランのテヘラン・タイムズ紙1月24日付)というホリエモン像が興味を引いたに違いない》として、次のように各国のメディアの取り上げかたに注目する。

《「新興勢力VS守旧派」という構図で世界に広めた》英フィナンシャル・タイムズ紙は、《ライブドアに東京地検による家宅捜査が入ったすぐあとに、「復讐の味を楽しむ日本の守旧派」と題した社説(同18日付)を掲載した。ノフジテレビを手に入れようとして以来、堀江貴文前社長は既存戦力にとって目の敵だったが、この捜査で溜飲を下げて

いる、というわけだ。そして、日本に次のような注文をつけている。／「企業の統治と監視がしっかりしていれば、自由で開かれた市場は繁栄への脅威ではなく、富の創出に不可欠だと日本は認識すべきだ。それがわかるまでは、今回の捜査結果にかかわらず、堀江のような型破りの人間を日本はもっと必要としている」》

「活力門的錬金術」と題する記事を載せた北京の大衆紙「新京報」は、「堀江を代表とする新興企業家は（企業合併で利益を得る）米国式の手法を取り入れ、日本の伝統的なビジネスエリート層を激怒させたが、多数の若い人々を起業に向かわせた」と解説した（因みに、「活力門」は英語の「ライブドア」の意識で、「フオリーマン」の発音はホリエモンに似ている）。堀江流の虚像ばかりを暴く日本メディアの報道と異なって、《海外では、ダークスーツの顔のないビジネスマンが運営する「日本株式会社」を改革する「十字軍」（ロイター電 19 日）というイメージが強い》と指摘し、《米タイム誌（同 30 日号）でリチャード・カツ氏は、日本の高齢化が進むなかで、労働生産性を上げていくには、株主のパワーをいかしたり、海外からの投資をふやしたりするなどの企業改革が必要だと主張。「この一匹オオカミの背信容疑で、改革が妨げられるのは悲劇だ。日本がこの事件によって、株式市場の不透明さをぬぐうことができれば、改革の前進を加速させる」と書いた》ことに触れる。

また、ホリエモンと小泉首相との関連性について、仏ルモンド紙（同 24 日付）は、「堀江氏のマネーゲームの成功は、それを既存価値の破壊の手本とみる若者たちから絶賛された。小泉首相は、堀江氏を守旧派候補の選挙区に無党派の候補として送り込むことで、堀江氏が体現する変化する日本とのイメージを利用した」と報道し、《タイペイ・タイムズ（台湾）やハリージ・タイムズ（アラブ首長国連邦）などは、小泉政権がライブドア事件で野党から集中砲火を浴びていることや、そのあおりで内閣支持率がさがっているとの通信社電を掲載し、事件が政権の運営にも影響してきたことを報じている。》

海外メディアが今回の事件について、ホリエモンを「改革者」の側面から重視するように、『ニューズウィーク』（2・1）の記事も、《堀江は日本企業のビジネススタイルを根本から変えるという野望をいだいていた。迅速かつ大胆な企業買収を繰り返し、600万円の元手で始めた事業を、10年とたたぬうちに（昨年の最高時で）時価総額8000億円の会社に成長させた。／そんなライブドアは、ベンチャー企業の希望の星だった》と書き、彼の臆することのないチャレンジ精神に焦点を当てている。

《ほんの数年の間に、堀江はライブドアを国内有数の新興企業に育て上げ、その手法によって、不透明で排他的な日本の企業文化に戦いを挑んできた。

「堀江は好きになれない」と、テンブル大学（東京）のジェフ・キングストン教授は言う。「気に障るくだらない男だと思う。だが、彼は改革の推進力だった。日本企業に弱点を思い知らせ、規制を変えさせた。荒っぽいやり方ではあったが、彼は日本のビジネスエリートを 21 世紀の世界に引きずり出すことに成功した」

フジテレビとの熾烈な攻防では、堀江は劇場型の才能を発揮した。買収には失敗したが、もっと大きな戦果を上げた。リストラを進めて体力を強化し、株主価値を上げなければ買収される可能性があることを、日本企業に知らしめたのだ。小泉政権の改革推進派もここ数年、マクロ経済レベルで同様の変化を推し進めてきた。

実際、堀江は小泉改革のシンボリックな経営者といえるかもしれない。全盛期のライブドアは、小泉政権のめざす企業経営のあり方を具現化するような存在だった。そこでは年功序列よりも個々人の実績が重視され、リスクを伴う事業への挑戦が奨励されていた。また、ライブドアは小泉政権の規制緩和策によって恩恵を受けてもいる。株式分割をしやすくした商法改正がいい例だろう（皮肉なもので、それで墓穴を掘った）。

同誌の別の記事では、「投資家は勉強しないと、ずる賢い人にだまされちゃいますよ」と、昨年3月、ホリエモンが東京・有楽町の外国特派員協会に集まった外国メディアの記者たちの前で語ったことを冒頭に掲げて、今回の事件で《投資家をだまそうとしたのはほかでもないライブドア自身だったことになる》と皮肉りながら、《堀江は彼だけの力で時代の寵児となったわけではない。法の抜け穴を突いた錬金術にだけ注目が集まることは、堀江のイメージを利用してブームをあおった人々の責任を見失わせかねない》と、こう問いかける。

《堀江やライブドアの女性広報をタレント扱いし、「ヒルズ族」と呼んでもち上げたのは誰か。日本を代表する経済団体へのライブドアの加盟を承認し、伝統的な経営者像とは明らかに異なる堀江を迎え入れたのは誰か。政界の「抵抗勢力」を滅ぼすために、堀江を衆院選に立候補させたのは誰か。

「多くの人が当然と思うやり方に従わなくても、成功をつかむことはできる。堀江は若者にそんな夢を与えた」と、フィナンシャル・タイムズ紙ドイツ版の記者マーティン・コリングは言う。「そうした夢を日本のメディアがあおり立て、小泉首相まで自らの目標のためにブームを利用した」

画一的な日本経済や社会に世界とは異質な、閉鎖的な仕組みを感じ取っているらしい海外メディアからすれば、堀江流の違法とされるマイナス面よりも、世界に通じるプラス面に対する評価のほうにより大きく注目しようとする傾向が窺われる。「実際にはすべての日本人が盲目的にルールに従い、同じやり方でビジネスをするわけではない。堀江は、そうしたステレオタイプでないイメージを強調するのに役立つ存在だった」（ロサンゼルス・タイムズ、ブルース・ウォレス東京支局長）とか、「今回の捜査は、日本社会から堀江的経営への『刺客』のように映る」「マネーゲームを象徴するライブドアをたたくことで、バブル化の気配を見せていた株価や地価の上昇に警鐘を鳴らそうとしたのかもしれない」（韓国のテレビ局SBS東京支局記者、趙盛元）といった発言を取り上げて、「日本経済への二つの貢献」を明示する。

《違法行為は別にして、堀江は二つの点で日本経済に貢献したと、日本で起業する外国

人を取材した『セイイング・イエス・トゥー・ジャパン』の共著者カール・ケイは言う。インターネットにはチャンスが埋もれていることと、M & A（企業の合併・買収）で企業を拡張するという欧米では当たり前の手法を広く認識させたことだ。》

記事は、《フィナンシャル・タイムズのデービッド・ピリング東京支局長が指摘するように、堀江はコンセンサス重視のビジネス風土を変えたい人々にとっては英雄であり、思いやりのある資本主義を重視する人々にとっては天敵だった。堀江には、そのせいで両極端な二つの「虚像」がつきまとう。

外国特派員協会には、講演者が名前と好きな言葉などを記すサイン帳がある。彼なら「得意満面」とでも書いたのかな - そう思って堀江が書いた欄をのぞいてみた人物によれば、そこには「諸行無常」と書いてあったという。》

そして、《自分が何者か、最も理解していたのは堀江自身かもしれない》と締め括る。

ライブドア事件の堀江貴文と光クラブ事件の山崎晃嗣とが対比されて論じられることが多かったが、同様にライブドアとオウムの類似についての言及も目についた。たとえば、江川紹子は『アエラ』（2013）で、《念のために申し上げておくが、私はオウムとライブドアの類似を指摘する言説には同調しない。それどころか、この両団体を安易に重ね合わせて論じること自体、厳に慎むべきだ、と思う。オウムは、人々の心を呪縛し、物事の判断力さえ奪ってしまった挙げ句に人殺しを重ねた。（中略）ライブドアは、平均在職期間がわずか1年半ほどという短さを見れば分かるように、社員を心身共に縛りつけるようなことはしていない》と強調しながらも、若者に対する影響の及ぼしかたの類似性については、やはり充分注意は払っている。

《人々がカネとモノに狂奔した反動だろうか、90年代には精神的なものに価値を置こうとする動きがあった。バブル時代が終焉を迎えようとする頃、オカルト、精神世界、密教、禅などが人々の関心を集め、第3次宗教ブームと呼ばれた。オウム真理教が大きくなったのも、そんな時代だった。それは、堀江氏が東大に入って悶々とし、その後にやりたいことを見つけていく時期と重なっている。

オウムの教祖は「悪魔の本性、それは物質である」と断じていた。物質こそが人々の心を汚し、世の中を悪くする原因だとして、「悪魔の支配から離れよ」と説いた。そして自らは「人類救済活動」を行っており、その手伝いをする若い人たちの参加を求めていると呼びかけていた。自分の生きる方向性を模索している若者の中に、「人類救済」というキャッチフレーズに使命感を刺激され、自分の存在意味を確認し、生きる目的を見つけたような気分になった人々がいた。》

生きるための「何か」を見つけようとする自分探し、自己実現の方法を模索していた若者たちに《精神世界の重要性を強調》するオウムは大きな影響力を与えたが、そのオウムも地下鉄サリン事件等で挫折した。《けれど、目標を見つけあぐねている若者たちの行き場が見つかったわけではない。景気の低迷もあって、就職の門戸も狭かった。そ

んな中で、フリーターの数はますます増えていった。》そんなフリーターの気分を味わっていた学生時代の堀江氏も、《バブル崩壊でろくなアルバイトも見つからず、消去法でコンピューター関連の仕事を選》び、《インターネットに「無限の将来性」を感じ、のめり込んだ》。オウムの教祖が起訴され、東京地裁が教団に対する破産宣告を行った翌月の96年4月、「有限会社オン・ザ・エッジ」を立ち上げた《堀江氏は、オウムが急速に若者たちへの影響力を失うのと入れ替わるように、社会に登場した。》

「金で買えるものは何もない」のオウムが退場せざるをえなくなったその後に、「金で何でも買える」のライブドアが登場することになるのは、ある意味で必然であった。ニートな若者にとって、《親の七光りもなければ、特別なコネもなく、身一つでのし上がってきた。それどころか、学生時代は半ば引きこもりのような毎日を送る時期があった、という》堀江氏は、《同じ土壌から「勝ち組」に駆け上がった》スターであり、《そのうえ、彼は明るい未来像を描いて見せてくれた》し、《日頃からも、ブログで転職に関する相談を受けたり、セミナーで起業を勧めるなど、若い世代はやりたいことを思い切りやれと激励のメッセージを発し続けた。決して、自分さえ儲かればあとはどうでもいい、という態度ではない。》したがって、そんな彼の支持者は若者だけでなく、地方の年配層にも結構いた。逮捕後も彼の言動について「プラス」と答える人も多く、《彼を全否定してしまうだけでは、なぜホリエモン現象と呼ばれる大きな流れができたのか、そしてこの流れがこれからどうなっていくのかを考えることはできない》と、彼女は結ぶ。

大沢真幸は2・8付神戸朝刊でライブドアとオウムの類似を「破壊者」としての相に求める。《麻原彰晃は自身をシヴァ神（ヒンドウの破壊神）の化身と称した。オウムを特徴づけるのは、徹底した破壊、肯定なき全的な否定への志向であり、その現れがハルマゲドンであった。同じことはライブドアにも言える。ホリエモンが若者を魅了したのは、彼が - 無名企業でありながら球団買収に名乗りを上げたり、破天荒な方法で巨大な放送局の買収を試みたりして - 既存の慣習を破壊し、否定する者として登場したからである。》「（自民党を）ぶっ壊す」と言って登場した小泉人気の秘密もまた、《「純粋な否定」の「肯定的な魅力」への転回》にあるとみる。

《こうしたメカニズムは、民主主義の逆説と結びついている。日本の国政は、10年以上、低投票率にあえいできたが、昨年の総選挙では若者層が選挙に回帰した。なぜか？

今、どんな肯定的な価値や政治理念も魅力的ではなく、「真実」には見えない（だから政治に参加する気が起きない）としよう。だがこのとき、ただ一つ、魅惑的な光彩を放ちうるものがある。

それこそ、ここまで述べてきたこと、つまりそれら肯定的なものの一切を断固として拒否し、否定することである。小泉首相が投入した、純化した否定の精神が、代表制からの疎外を覚えていた者を引きつけ、「そこに自らが代表＝表現されている」との感覚を彼らに与えたのである。

同じ仕組みは、ライブドア事件でも作用している。ライブドアは、株式市場に大量の個人投資家を呼び込むのに - 株式市場の「民主化」に - 貢献した。そこには、ライブドアの否定（破壊）の精神に起因する引力が作用していないだろうか。

分割されたライブドア株には個人投資家が殺到し、法外な値が付いたのはそのためではないか。ライブドアの挫折が東証システムを停止に導いたという事実は、少なくとも、この企業が株式市場全体の個人投資家の振る舞いを規定する有力な原因であったことを示している。》

オウムの徹底した破壊には、オウム自身は含まれなかった。「（自民党を）ぶっ壊す」の小泉首相の《純化した否定の精神》にも、自分自身は含まれていなかった。つまり、自分以外の自民党を「ぶっ壊す」にしかすぎなかった。同様に、ライブドアの否定（破壊）にも、ライブドア自身は含まれていなかった。したがって、それらの否定（破壊）はすべて疎外されている者たちの怨念的な行動にほかならなかったとみなされる。そうであるなら、彼らの否定（破壊）は自分たちの体制をつくり上げるためのものでしかなく、少なくともオウムを除く世俗の小泉首相、ホリエモンについていえば、彼らの否定（破壊）の「その先」に一体なにがあるのかは一向に見えてこなかった。郵政改革によってどのような国造りを志向しているのかが見えなかったし、「時価総額世界一」をめざしてなにをしようとするのかが全く見えてこなかった。

《極端な「虚構」への志向と極端な「現実」への志向との合致という点でも、ライブドアはオウムと似ている。ライブドアの株価は、巧妙な操作によって支えられた、極端にバーチャルなものであった。金^{ひんしゆく}がすべてであるかのようなホリエモンの、現実主義が響き^{ひびく}を響かしているが、もし本来志向されているものが純粋な否定でしかないとするれば、つまりどんな価値や理念も「志向対象の座」を占めることができないとするれば、そこを占める唯一のものは、あられもない経済的利害以外にはないだろう。》

日常の現実が生き難い者にとっては、オウムがめざす「虚構」こそが生きるに値する「現実」にほかならなかった。同様に、日常の現実によそよそしさを感じている者にとっては、日常の現実を成り立たしめている経済的、社会的な障壁の一つ一つを引っくり返すライブドアの行動はカタルシスであった。精神世界に根を張ろうとして実利としての金を重視してきたオウムの精神世界の破綻が宣告されたとき、そこに残ったものは「精神世界なき金」にほかならなかった。人々はオウム以外の精神世界になおמושがるか、それとも「精神世界なき金」にすぎるか、のいずれかの途を突き進む以外にはなかった。もし現世では結局のところ「精神世界なき金」にすぎるしかないと思い定めるなら、否が応でも「金で何でも買える」ことを信条としなければ、「精神世界なき金」の世界を生き抜くことはできなかった。"金で買えるものはなににもない、精神世界の無意味をオウムの挫折で知ったらばこそ、「金で何でも買える」世界で生きることが誰にとっても改めて浮上し、ライブドアはその先鋭的に純化した行動者として登場することになったのだ。

《脱社会的傾向を持つ若者に支持を得た》点で、ライブドアとオウムは類似すると、武田徹は1・30付産経夕刊で指摘する。《オウムに走った若者は合理主義的な思考を強制する近代社会に違和感を覚えていた。そして世俗化されない野性的な教義を説き、信じる者に非合理的な世界観を体感させてくれると謳うオウム真理教に惹かれ、入信していった。》彼らの脱社会的行動はやがて反社会的行為につながるが、ライブドアの支持者たちもバブル崩壊後の日本経済の閉塞状況を一身に浴びて、雇用の急速な流動性と所得の激減に不満を募らせていた。そんな日本経済を象徴する株式市場に裂け目を引き起こしたのが、ライブドアだった。

《分割によって株数は増え、売買単価は安い。毎週のように企業合併を繰り返し、球団買収、ニッポン放送買収の奇手を打ち続けて社長の一挙手一投足にマスコミの注目も集まる。当然、株価は乱高下し、そこに「一攫千金」の夢が集まる事情があった。

報道では堀江容疑者の「時価総額主義」が暴走し、犯行に至ったという解釈が主流のようだが、たとえ虚偽の手法で増やされていたとしても、実際に株の買い手が多くいなければ時価総額は増えて行かない。ライブドア関連株こそ自分を今の閉塞状況から救い出してくれる - 、そう考える多くの若者がデイトレーダーとなって株を売買し、結果としてライブドアの時価総額を増やして行く一種の「共犯関係」がそこに結ばれていた事実を無視すべきではない。》

彼らの脱社会的傾向が急激化して反社会化していく点でオウムと同じだが、《連合赤軍事件では政治が、オウム真理教事件で宗教が、そしてライブドアで経済が、脱社会的傾向の受け皿として期待され》るという繰り返しの中で、脱社会的傾向が《反社会的行動に繋がる流れを、日本社会はいまだに防ぎ得ていない》歪みに突き入る視点の現出を問う。東浩紀も『論座』(06・3)で、《一方の受け皿は出家で、他方の受け皿は億万長者だが、ここでは重要なのは、両者の存在が既存の社会体制を超越している(ように見える)ことである。目の前の現実に見いだせず、超越的な何かを一足飛びに手にしたいと願う若者の性急さが、90年代前半には荒唐無稽なカルト教団に、00年代前半には投機的なマネーゲームへとなだれ込》むという、若者の《「脱社会的」な欲望》に注視して、こういう。

《若い世代を支配する堀江への共感、別に拝金主義や格差社会を表現するものではない。筆者の世代が堀江を支持しているのは、おそらく、彼の行動が正しいと考えているからでも、世代を代弁していると感じているからでもない。そもそも団塊ジュニア以下の世代は「下流」志向であり、堀江のような億万長者に本気では憧れていない。しかしそれでも、彼らは堀江を支持する。なぜなら彼らは、自分の夢がもてないかわりに、夢を体現するだれかをつねに必要としているからだ。》だがそれは、《単に現実逃避》にすぎず、《ホリエモンという「夢」に頼るのは間違い》であり、《目の前の現実に見いだ》す知恵を身につける以外にない、と主張する。 2006年2月19日記